

Title	アフリカの視点で見る「テロ」事件
Author(s)	ムアンギ, G.C.; 萩原, 弘子; 酒井, 隆史
Editor(s)	
Citation	国際文化. 2003, 4, p.45-59
Issue Date	2003-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/1089">http://hdl.handle.net/10466/1089</a>
Rights	

## アフリカの視点で見る「テロ」事件

G・C・ムアンギ

(聞き手 萩原弘子 酒井隆史)

2003年1月10日に、四国学院大学のG・C・ムアンギさん（平和学、アフリカ研究）においでいただいて、対談形式による講演会を行ないました。いま世界各地に戦場があり、硝煙のきな臭い匂いが世界全体をおおいつつあるような現状です。特に2001年9月11日の、一般に「同時多発テロ」と呼ばれることの多い事件のあとは、それがはっきりしてきました。むろん「自爆テロ」といった行為には、より公正な社会を展望させてくれる提起があるわけではなく、行き止まりの絶望しかありません。しかしだからと言って、「テロリズム」撲滅のためには武力行使もやむをえないのだといった強大権力の論理もまた、新しい公正な世界をつくろうという展望につながるものではありません。絶望を拒否して、強大権力の論理に呑みこまれることなく、現実のどんな矛盾が世界のいまをつくりだしているのかを具体的に見たい——そう考えて、ムアンギさんに、現在の情勢に焦点をあてたお話を伺う場をつくりました。

ケニア人として長年日本で暮らしてこられ、日本の現実もよく知るムアンギさんにアフリカ人の視点からのお話を聴く機会を国際文化専攻の学生たちと共有できたことはなによりでした。以下は録音記録をもとに編集したものです。(文責 萩原弘子、酒井隆史)

## 2002年11月モンバサの事件から始めて

萩原 ケニア第2の都市モンバサのパラダイス・ホテルで昨年11月に起きた爆破事件から話を始めたいと思います。モンバサがどういう歴史をもつ、どういう都市かということが、あの事件を理解するうえで重要だと思いますが、その点を教えてください。

ムアングィ インド洋に面したモンバサは、古くから発達していた港湾都市です。いまはヨーロッパ人のリゾート地であり、街にはドイツ人が多く住む地区や、ユダヤ人が多く住む地区などもあります。爆破されたパラダイス・ホテルはイスラエル人の宿泊するホテルでした。あたりはリトル・テルアヴィヴと呼ばれるほど、ユダヤ人の多い地区です。爆破で亡くなったのは、実行犯3人のほかは、イスラエル人3人、ケニア人10人でした。犠牲になったケニア人の死体の写真を、アメリカのアソシエイテッド・プレス社が配信して、各紙が掲載した問題についてはあとでお話ししますが、写真に写っているのは裸の死体でした。上半身が裸なのは、ホテル客に「伝統的」アフリカのダンスを見せるダンサーたちだったからです。

爆破事件1998年のナイロビのアメリカ大使館爆破に次いで2度目です。もちろん、いったいなぜ関係のないケニア人が巻きこまれないといけないのか、というのがケニア人の感覚です。

## 1998年ナイロビ、ダル・エス・サラームの米大使館爆破事件

萩原 記憶に新しい一連の「テロ」事件をざっとふりかえってみますと、ニューヨークの世界貿易センターは1993年にも爆破されています。このときは5、6人の犠牲者が出ました。1998年8月7日、ナイロビのアメリカ大使館と、ダル・エス・サラーム（タンザニア）のアメリカ大使館が自動車爆弾で爆破されました。このあとクリントンは、スーダンとアフガニスタンに向けたミサイルの発射命令を出しています。そして2001年9月11日のニューヨーク世界貿易センター、国防総省などの同時「テロ」事件です。アメリカのテレビ・ニュースでは「テロリズムとの戦争」という煽情的なタイトルを掲げて報道合戦を繰り広げました。ブッシュ政権もテロリズムとの闘いを怒号して、アフガニスタン空爆を行ない、ついに政権交替までさせました。

センセーショナルなアメリカ発の報道の論調では、ファナティックなイスラム教原理主義テロリストが悪いといったことになってはいますが、私たちはもっと緻密に歴史と現実を見たいと思います。

たとえば、98年のアフリカでアメリカの警察がどう動いたか。8月7日に東アフリカの2つの国でアメリカ大使館が爆破されましたが、同じ8月の月末にはケープ・タウン（南アフリカ共和国）でアメリカ資本のレストラン、プラネット・ハリウッドが爆破されました。先の事件と違って、これはアルカイダによるものではないとされています。FBIがこれを調査しました。東アフリカでアメリカ大使館爆破事件を調査したFBIが、月末には南アにやってきてプラネット・ハリウッド爆破事件の調査にあたったのです。FBI、つまりアメリカの連邦警察が、在外公館の関わる事件を調べるのはわかりますが、アメリカ資本のレストランの爆破も調べたということは目を惹きます。日本のマクドナルドでなにか起こったとき、FBIが調べに来るでしょうか。アフリカではそんな事が起こっているのです。国家利益を脅かしかねない「テロ」事件に関しては、FBIの動きは世界規模です。

「イスラム＝悪」といった単純な図式にもとづく反テロ・キャンペーンが繰り返されるいっぽうで、「深遠」な文明論に「衝突」の淵源を求めて、解決しえない宿命の対決が起きているかのような話も流布しています。私としては、現今世界で資本によるグローバリゼーションの過程が生み出した矛盾と不公正の具体相を直視することがたいせつだと思いますので、話は具体的に進めたいと思います。1998年のナイロビのアメリカ大使館爆破を、ケニア人としてはどう見るかといったところからお話ししてくださいませか。

ムアンギ そうですね。98年の事件では、亡くなったのは212人。うちアメリカ人は12人、あとはケニア人でした。負傷者は4000人以上、たいへんな数のケニア人が犠牲になりました。アメリカの海兵隊が来てしたことは、アメリカ人の死体を運び出すことでした。実は亡くなったなかにアフリカン・アメリカンの女性がひとりいたのですが、最初その人は、黒人だからケニア人だと思われて運び出されなかったのです。彼女はアメリカ人とは

思われなかったのです。

**萩原** ダル・エス・サラームでは、亡くなったのが11人、うちアメリカ人4人。負傷者は72人でした。いつでもどこでもアメリカ軍の方針ははっきりしています。「アメリカ人の死体が優先 (American bodies first)」です。しかしそのアメリカ人というのは白人なんですね。

**ムアンギ** はい。このときケニア人は、アメリカという超大国の傲慢さを痛感しました。ケニア人が怒ったのは、アフリカ人が人間扱いされないというのをまのあたりに見たからです。実は98年の爆破事件で最も被害が大きかったのは大使館ではなく、その隣のビルでした。ここでは民間人がたくさん亡くなりました。しかしアメリカの海兵隊はあたりを立ち入り禁止にし、爆破から3日間ほどは通行禁止でした。ビルのなかではまだ生きてる人もいて、救援を求める声も聞こえるけれど、アメリカ海兵隊はケニア人による救援を許さなかった。200人ものケニア人が亡くなったのは、アメリカのせいです。

ナイロビ事件ではイスラエル軍が救援に来ました。イスラエル軍といえばパレスチナ人に対する苛酷な扱いをしているために国際的には批判されることが多いのですが、このときケニア人はイスラエル軍兵士には感謝の気持ちをいただきました。犠牲者の救出活動からケニア人を締め出すアメリカに対して、なにをすると正面から言ってくれたのがイスラエル軍兵士だったからです。彼らがいなかったら、もっとたくさんの犠牲者が出ていたでしょう。

### 東アフリカとイスラエル

**ムアンギ** ケニア人はそもそもイスラエル建国(1948年)に共感をもっている人が多いです。1963年にケニア独立をかちとるまでのマウマウ闘争では、植民地からの解放をめざす自分たちの闘いを、モーゼによる出エジプト、つまりエジプト虜囚からのイスラエル解放になぞらえることがよくありました。実は、ナセルを指導者とする現代エジプトは1950年代のマウマウ闘争を資金面も含めて支援していましたから、比喻としてはおかしいですね。モーゼが導いた約束の地カナンへのユダヤ人帰還になぞらえてイスラエル

建国を言うことはよく行なわれたので、ケニア人は共感をもったのです。イスラエルはケニア人のそうした共感を利用してきました。

1967年6月の第3次中東戦争のあとなど、モシェ・ダヤン（イスラエル国防相）がモンバサに休暇を過ごしに来たりしていました。ケニアはイスラエル人にとってそういう場所になっていました。

**萩原** イスラエルといえば、アメリカとの関係がとても強い国ですが、ケニア人の対イスラエル感覚は少し違うのですね。ユダヤ人の国イスラエルをどこにつくろうかという案はいくつかあって、ウガンダにする話もありました。

**ムアンギ** ケニアにという案もありました。イスラエルと東アフリカの関わりには独特の歴史があります。

1976年のエンテベ事件では、パレスチナ人ゲリラがエール・フランス機をハイジャックして、ウガンダのエンテベ空港に着陸しました。イスラエル人乗客を人質にして、仲間との交換を要求するというできごとです。イスラエルからの救援機による救出劇が知られています。救援機は途中で給油が必要でした。OAU（アフリカ統一機構）は反イスラエルですから、イスラエル機が給油できる場所がない。しかしジョモ・ケニヤッタ大統領はそれを批判して、ケニアで給油させたのです。救援時には、ウガンダ人が巻き添えになって亡くなりました。

そのあと、エンテベの報復として、ナイロビにある高級ホテル・チェーンのノーフォークがパレスチナ人によって爆破されます。ホテルの経営者ブロックは、20世紀はじめにポグロムを逃れてロシアからケニアに入植したユダヤ人でした。2002年モンバサの前にも、イスラエルが関わったの事件はあったのです。

モンバサの実行犯はジャマール・イスラミアという、アルカイダよりも古いグループと言われます。モンバサでは、ほぼ同時に同グループによる飛行機爆破とミサイル爆撃も計画されていて、いずれも標的をはずして未遂に終わりました。ひとつはスイミング・プールに落ちたのですが、その不発弾をめぐってケニアとイスラエルが捜査権を争いました。モンバサの海岸近くの地区はリトル・テルアヴィヴと呼ばれ、なにもかもイスラエル

人がコントロールしています。ケニア人がそこに入っていくと、外国みたいな感じがするほどです。自分の国なのに簡単には入れません。あたりにはドイツ人地区もあって、そこでは新聞はドイツ語、通貨はドイツ・マルクが使われています。パラダイス・ホテル爆破で亡くなったケニア人は、そういう外国人租界のような地区にあるホテルで、観光客のために踊りを見せるダンサーでした。

亡くなった彼らの死体が、爆破後の瓦礫の山のなかにある悲惨な写真をアソシエイテッド・プレスが新聞各社に配信し、その写真が世界に流されたことについては、『イースト・アフリカン』紙特派員ダギ・キマニが批判的に書いています。数千人が亡くなった2001年の世界貿易センター事件のときは、死体の写真はいっさい発表されませんでした。それなのに、なぜアフリカ人の死体は発表できるのか。「ひどく破壊されたアフリカ人の死体の写真を発表することは、アフリカを死と残虐に満ちた野蛮な大陸とするステロタイプを強化している」とキマニは書いています。アフリカ人死者に対する敬意はないのか、ということです。

モンバサは米軍艦船の寄港地ともなっていて、インド洋の島ディエゴ・ガルシアにある米軍と一緒に中東を見張っています。そんなふうにはケニアは使われているのです。いまだに植民地みたいなものです。

### 起こっているのは国際的な階級闘争

ムアンギ 「テロ」事件は、ハンチントンの言うような文明の衝突などではありません。ハンチントンは、そういう言い方で現実をごまかそうとしています。起こっているのは十字軍と聖戦の対決ではありません。イスラム教は東西冷戦終結後の新しい敵となったかのようなようですが、イスラム教徒のほとんどはアルカイダを支持していないといっても過言ではないでしょう。起こっているのは、国際的な階級闘争です。

萩原 ハンチントンに典型的に見られるような大風呂敷の文明論、文明の違いに由来する深い問題、解決しようのない深く宿命的な問題があるかのような議論は、世界規模の階級闘争の現実を見ないためと言えますね。

きょうの対談のためにあらかじめ皆さんにお配りしていた資料がありま

す。「世界支配ゲーム」と題されたカスピ海油田からの石油輸送パイプ・ライン建設の計画地図と、1995年に始まるアメリカの石油会社ユノカル社による建設計画をめぐる交渉の経緯を追う年表です。1パイプ・ラインはカスピ海の推定2000億バレル<sup>2</sup>の石油と天然ガスをトゥルクメニスタン、アフガニスタン、パキスタンを through アラビア海まで運ぼうというものです。年表の年次を追って見ていくと、1997年にはユノカル社がタリバン政権の代表者をテキサスに招いて会談したとあります。タリバンの蜜月時代もあったのです。それがどうやら1998年には破綻して、アメリカ抜きでパイプ・ライン建設を進める動きになったことから、このかんのいろんな事件が起こってきたようですね。

**ムアンギ** 私の言う「国際的な階級闘争」というのも抽象的に聞こえるかもしれませんが、この地図と年表はその現実がどういうものかを教えてくれます。アフガニスタン経由で直径42インチの石油輸送パイプを建設すれば、西洋世界は2015年までに500パーセントの利潤増大を見込めるとこの年表にあります。石油中毒とでも言いたくなるこの姿勢は、利潤のためです。

**萩原** アメリカによる武力行使と強引な介入の結果、タリバン政権は倒れ、そのあと暫定政権についたハミッド・カルザイはユノカル社のトップ・アドバイザーだった人物です。パイプ・ライン計画も復活して、ユノカル社主導で行なわれることが2002年5月には合意されたといえます。

**ムアンギ** 現在の紛争は宗教の対立から起こっているものではなく、根本は資本主義システムから起こっているのです。カルザイはキリスト教徒ではないでしょう。

**萩原** 「植民地主義と現代世界」の講義のなかで、ケニアの女性、ワンガリ・マータイさんが始めたグリーンベルト運動のビデオを見せていただきました。植民地時代以来のモノカルチャーとグローバル化の結果、進む砂漠化と森林資源の枯渇をどうにかしようと、女性たちの手で木を植える運動についてのものでした。ビデオのなかでマータイさんが、「アメリカは世界最大の消費者であり、最大の汚染者である」という発言をしておられます。92年にリオデジャネイロ（ブラジル）で開かれた国連環境開発会議でも、また97年京都での地球温暖化防止に関する会議<sup>3</sup>でも、CO2排



出を減らそうとする動きに強く抵抗した北世界の国はアメリカでした。環境保護は、資本のフリーハンドには邪魔になるのです。

21世紀初の独立国となった東チモールでも、これまでなかなか独立が果たせなかった大きな理由は、近海の海底油田開発の問題があったからでしょう。オーストラリアとインドネシアはそれを盗掘してきました。東チモールのインドネシア併合を実現しようと国連で積極的なロビー活動をしてきたのが日本です。インドネシアの一部であれば、そしてインドネシアでスハルトのような政権が続くなら、海底油田開発については交渉しやすいインドネシアを相手に交渉すればよいからです。スハルト政権は倒れ、かつてインドネシア軍による大虐殺を経験した東チモールもやっと独立することができました。インドネシア軍に武器を供給していたのはアメリカでした。

東チモールが独立後すぐに着手したのは海底油田開発に関わるオーストラリアとの条約で、利潤の9割は東チモールにという内容です。

**ムアンギ** 宗教が違っていようとも、超大国の家来のような国はあります。スハルトのインドネシアにしても、サウジ・アラビアにしてもそうです。大国にとっての問題は西洋世界の企業の利益拡大に協力してくれるかどうかです。東チモールは、ずっとアメリカ通貨が流通していたようなところでした。独立までの紛争の原因はいわば、東チモールの石油なのか、西洋の石油なのかという問題だったともいえます。

実は石油パイプ・ラインについては、別の計画もあります。ロシアはかなりの産油国ですが、ロシアの石油をシベリア経由で日本海まで輸送しようというものです。カスピ海油田からのアフガニスタン・ルート輸送計画を、ロシアのプーチンはいまいましく思っていました。日露間で早く北方領土問題を解決して、シベリアを通して日本まで石油を運びたい。<sup>4</sup>これとは別に、もうひとつのパイプ・ライン計画もあり、これは中国供給をにらんだものです。中国ルートよりシベリアのほうが敷設距離が倍ほども長く、建設コストはかかりますが、シベリア開発計画とも関係しているのでシベリア案を推す声も高いです。これらどの石油パイプ・ライン計画も、消費地と目されているのは日本、韓国など東アジアのエネルギー依存国で

す。

アフガニスタン、イラクをアメリカが敵視するのは、石油の問題ともいえるでしょう。超大権力をもつのは石油メジャー会社です。アメリカ大統領といえどオール・マイティではなく、石油メジャーの権益を守るためにいるようなものです。

### グローバリゼーションの現状を批判する運動

萩原 90年代に入ると、それまでの開発計画とグローバリゼーションの結果として南北経済格差の拡大化もきわまり、世界の貧富の差が目をおおうばかりのものとなってきました。そしてそのことが北世界のメディアでも報道されるようになり、グローバリゼーションのありように反省を求める運動、反グローバリゼーションの運動が起こってきます。これが90年代の新しい局面でしょう。

債務削減を求めるジュビリー2000の運動をはじめとする累積債務に関する運動のおかげもあって、累積債務が不当な債務でしかない現実、実は北が南を援助しているのではなく、南が北に債務利子返済というかたちで資金提供しているといってもよい現実がかなり見えてきました。サブ・サハラの重債務貧困国についての債務削減は西側首脳国会議でも話し合われるようになっていきます。1999年にはシアトルのWTO（世界貿易機構）のミレニアム・ラウンド会議を、数万人のデモによって流会にさせました。<sup>5</sup> 2000年にハバナ（キューバ）で行なわれたG77会議（133カ国参加）で出された「ハバナ宣言」では、グローバリゼーションの現状を批判し、債務削減要求を掲げています。2001年ジェノヴァのG8サミットは、世界中から集まった反グローバリゼーション運動の人々に取り囲まれて行なわれました。2002年夏のジョハネスバーグ（南アフリカ共和国）で行なわれた環境・開発サミットでも、経済のグローバル化に反対するNGOの動きがありました。戦後、IMF（国際通貨基金）やWB（世界銀行）といった国際機関を通じてアメリカ主導で進められてきた自由貿易主義と規制緩和によるグローバリゼーションという世界ルールに対して、草の根の反対の声が世界各地で挙がっています。

草の根の運動が世界規模でつながりつつあることに、資本も大国も危機を感じていると思います。「イスラム＝悪」という図式を強調しての「反テロ」報道も、そうした危機感の表われではないかと思います。

ムアンギ ヴェトナム戦争のときも、99年シアトル会議のときもそうでしたが、アメリカでも国のすることに反対する市民はいるのです。大切なことは市民がつながることでしょう。そこに希望があると思います。自分の国では独裁的な政権のせいで活動ができないといった状況もあるでしょうが、闘う市民が国を越えてつながって、外の人たちから言ってもらえるのもひとつです。カウンター・グローバリゼーション（対抗的グローバリゼーション）のつながりをつくるということです。

### 「中心を移す」

萩原 では、カウンター・グローバリゼーションの展望として、どういう社会をつくっていくのかということが問題になるでしょう。グローバル・スタンダードの採用には意味があるものもあります。たとえば、時間や暦です。社会によってそれぞれにまったく独自の計時法や標準時間を採用するようなことはもう考えられません。暦については、日本は元号が公式年次となっていますが、天皇の死で時間を区切るという日本にしか通用しない時間感覚など無用だと私は思っています。そういうことではグローバリゼーションは進めていきたい。モノの流通、人の交流についても、互いにやりとりして助け合っていく世界になるのはいいことだと思います。問題はその過程で生じる利潤の独占です。その独占に抗していくには、経済規模としては或る種の小ささを実現していく必要があるでしょう。食糧はできるだけ自給するとか、広域市場以前に狭域市場での自立をめざすといったことです。そのときに、植民地化やグローバリゼーション以前にそれぞれの社会がもっていたものをふりかえったり、取り戻したりすることも模索されるでしょう。昨日見せていただいたビデオのなかで、シンバブウェで農業自立を支える運動をする女性が、「アフリカ的精神」を取り戻そうという発言をしていたのも、そういうことだと思います。

でもそれを聞いた日本の日本人が、「うん、そのとおり。我々も日本精

神、ヤマト魂をたいせつにしよう」と言うと、なにか違ってしまう気がします。

ムアンギ 小説家グギ・ワ・ジオンゴが、それまでの英語による執筆ではなく、母語キクユ語で執筆することを表明したとき、過去に戻る後ろ向きの姿勢だといった批判を受けました。グローバルな世界の文化をめざすべきなのに、時代遅れだという批判です。しかし、グギは後ろ向きなわけではなく、キクユ語での執筆は「中心を移す」ことだと言っているのです。それぞれの文化を大切にこそ、世界はつながれるでしょう。そうでないと資本のグローバリゼーションには抵抗できないでしょう。自分のいるところでまず文化的にも自立することが必要です。そういうものが植民地支配によって潰されてきたので、だから取り戻す必要があるのです。強い者が生き残るといった社会進化論的な個人主義の論理が力をもつのを覆して、一緒に生きていくためには、家族や共同体のつながりが必要、アフリカ人は強くならなければという、あのジンバブウェの女性の発言になるのです。

多くの文化人類学者は、よその社会を調査してその過去をよかったと礼賛することをよくします。そうやって過去におしこめておけば、人は縛りやすい、支配しやすいですね。でもジンバブウェの女性が言っていたのはそういう過去への先祖帰りといった意味ではないのです。借りものの思想によらず、自分たちのもつ根のある思想、文化のなかでよいものを選択して生かしていこうということなのです。

萩原 アフリカにいいものがあるわけない、と言われつづけた歴史があるから、それに抵抗して「アフリカ的精神」を主張し、アフリカがまちがいなくもっているいいものを肯定していこうということなのでしょうね。

ムアンギ 日本の場合は、ミシマ・ユキオになってしまいますね。

萩原 どういう歴史文脈のなかで「アフリカ的精神」が言われるのか、ということを見ないといけないでしょう。

ムアンギ 日本は植民地支配をした国ですし、福沢諭吉の発言を見ても、日本人は、西洋並みで西洋をよく理解していて西洋に近いと考えていて、それはいいとは思いません。それでもアフリカから見ると、西洋に負けなかつ

た日本はモデルです。日本語をやめてフランス語にしたり英語にしたりはしていない。

日本がアメリカの方針に反対しないことの問題性は承知していますが、とにかく日本はアメリカの対等な「相手」ですが、ケニアは違います。ケニアでアメリカや西洋がもっている力はレベルが違うのです。私は人生の半分は日本社会で暮らしてきました。日本に来てよかったなと思うのは、日本に来なかったら、こういう国が世界にあるとはわからなかったでしょう。

**萩原** それは、ムアンギさんがイギリス統治下のケニアで生まれ育って、植民地支配がなにをどう潰すかを知っていて、それで日本をご覧になるから見えることなのでしょうね。

**ムアンギ** 植民地支配によって人間がどれほどだめにされるかというのは、その囲われた鳥カゴから出てほかの社会を見ないとわからないものです。教育にしても文化にしても、自分の言葉を使うというあたりまえのことが難しいのがアフリカです。でも日本に住んでみないと、そのあたりまえのことがそうはなかなかわからなかったです。

**萩原** たしかに、第3世界で高等教育を自分の言葉で受けられるのはけっこう少ないというのが現実ですからね。

### 2002年末のケニア大統領選挙について

**萩原** 12月29日に結果がでた大統領選挙で、「ケニア野党連合（NARC）」のムワイ・キバキが勝ちました。長期政権を誇った与党は後継候補を当選させることができませんでした。同時に行なわれた国会議員選挙でも野党連合は圧勝でした。選挙前は野党連合キバキ勝利を予測しない観測筋もありましたが、ムアンギさんはこの選挙結果をどうご覧になりますか。

**ムアンギ** 一昨日の講義で私がケニアの話ばかりしたので、アフリカのほかの話はしないのですかと言われたのですが、大統領選でキバキが勝ったのが嬉しくて、ケニアの話に集中してしまいました。私は1974年に日本に来たのですが、85年以来ケニアに帰れませんでした。モイ政権であるかぎり、ケニア入国は控えたほうがよいような状況でした。作家グギはケニアで政

治犯とされたことがある人ですが、グギと一緒に政治犯として投獄されていたコイギ・ワ・ワムウェレは、モイ大統領を倒すまで髪を切らないと宣言して、20年ほども髪を伸ばしていました。キバキ当選が決まって重い髪を切れるので、これで彼も肩が楽になるでしょう。切った髪を博物館に入れましょうかという話まであって、それには本人も驚いたようですが。

皮肉なことですが、ブッシュはこのキバキ当選を祝福し、自由で民主的な選挙でキバキが当選を果たしたことをよかったと言っています。ブッシュは、自分がわけのわからない選挙で大統領になったことを棚にあげて、ケニアの大統領選が民主的だと偉そうに言えるのでしょうかね。

アメリカとどういう関係を築くのか、モイ政権とは違うどういう政治をするのか。簡単ではないでしょうが、それでもワンガリ・マータイが環境問題の副大臣になったとか、女性閣僚が5人いるといった点を見ると、希望をもつことができます。これまでと違って私もケニアに行くことができますので、希望をもって見ていこうと思います。父が亡くなったときは葬式にも行けませんでした。モイ政権がいつ倒れるか予測できなかったので、母とも会えないままではいけないと思い、去年の夏はケニアから南アフリカまで母に来てもらいました。高齢ですが元気でよかったです。

大統領選はクリスマス直後でしたので、クリスマスは選挙運動で村や町をあげて忙しくしていて、クリスマスはなかったようなものです。モイの与党「ケニア・アフリカ民族同盟 (KANU)」は、モイの操り人形のようなウフル・ケニヤッタを後継候補に立てました。人々は、もし選挙でごまかされたりしたら、皆で蜂起してナイロビの大統領官邸まで行って、モイを追い出そうという勢いでした。もう我慢できないと人々は思っていました。キバキは圧勝しましたので、モイも敗北を認めざるを得ませんでした。人々の力で平和的、民主的に政権を交代させることができたのは、アフリカと世界にとってよき先例となるだろうと、ブッシュは言いました。ブッシュのような人に言ってほしくはないですが、今回の選挙結果が人々の希望であることはたしかです。

## 最後に

酒井 話の流れが面白くて、割りこめませんでした。最後に。僕はグローバルゼーションに関わっての安全保障のことなどで発言を求められることが多いのですが、これまでアフリカの視点がなかったなと思いました。きょうは、これまで見えなかったこともよく見えてきました。地政学的に言っても、もっとアフリカのことを見ないといけません。

日本の問題についても、お話を聞いていろいろ考えました。僕はヒップ・ホップ・ミュージックとかラップが好きなんです。最近日本では、最初はとても驚いた現象があります。黒人の表現を利用して、日本の右翼的で民族主義的な表現をしている、それが主流の音楽シーンに登場して、けっこう影響力をもったりしている、というものです。日本におけるサブカルチャー全般にいえることですが、世界の趨勢とは違って、あまり反グローバルゼーションの一翼を担うということにはなっていない。世界では下からのカウンター・グローバルゼーションの一翼をになうサブカルチャーがどこでもあるのですが、日本ではむしろ、政治的であると右翼的になる傾向があるようです。

それと関係があると思うのですが、日本社会はいま、ナルシシスティックになれるもの、自己肯定できる心地よいものを求めています。アメリカでも日本でも、人々の反省能力や自己批判能力の欠如はかなりのものではないでしょうか。「アメリカの振り見て我が振りなおせ」とよく僕は言うのですが、アメリカのことをファナティックだ、傲慢だと批判する日本人ジャーナリストが、北朝鮮についてはアメリカと同じ調子でものを書いてしまう。正義、正義と言い募るアメリカ政府の姿勢からは距離をとって、ではアメリカは歴史上なにをしてきたんだ、先住民の問題はどうなんだといったことを書くジャーナリストが、北朝鮮の「拉致」問題になると、日本人は全員怒るべきなんだという調子で書いている。歴史上日本は朝鮮半島でなにをしてきたかという視点は落ちてしまう。パンアフリカニズムの創始者のひとりと言われるマーカス・ガーヴェイが満州事変以降の世界の動向を見て日本もアメリカと同じだと言いましたが、結局そういうことになっ

ています。

いまアメリカはリベラル・デモクラシーと相容れないとして、いわゆるイスラム「原理主義」を批判していますが、アメリカ自身「原理主義」大国となっていて、オクラホマの連邦ビル爆破テロにもあるように、テロと結びつく傾向のあるキリスト教「原理主義」者を大量に抱えている。ブッシュの背後にはあきらかにそういう「原理主義」的な諸団体があります。しかし内側のそうしたファナティズムにブッシュが言及することはありません。そうしたアメリカの振る舞いを見て、みずからの振る舞いも見えてこないといけないでしょうね。アメリカの傲慢さ、鈍感さを見て、みずからの傲慢さ、鈍感さを知るべきなのが今の日本だと思います。

考える機会を下さったムアンギさん、どうもありがとうございました。

#### 【註】

- 1) ウェブ頁住所 <http://www.ringnebul.com/Oil/Timeline.htm>
- 2) 確認埋蔵量最大国サウジ・アラビアは2635億バレル（1999年同国公式統計）。
- 3) 正式には、1992年リオデジャネイロで締結された「気候変動に関する国際連合枠組み条約」の第3回締約国会議。
- 4) いわゆる極東石油パイプ・ライン計画。シベリアを通ず計画は一般に「太平洋ルート」と言われる。
- 5) 反・保護貿易主義と規制緩和の徹底のため、物品だけでなく、知的所有権、サービス提供、投資のグローバル化を推進する拘束力の強い21世紀ルールをつくろうという会議。第3世界諸国の閣僚も新ルールに反対したこともあって流会となった。